

## 第3期中期行動計画スタートにあたって

4年間教育開発センター長として活躍された筒井琢磨教授（現代日本社会学部長）、そして長年FD・SD室長として尽力していただいた中村哲夫名誉教授に代わり、本年度から私駒田が教育開発センター長に、上野祐一准教授がFD・SD室長に就任しました。教育開発センターの4室に関わったことがなく、それだけに外からの視点でこれまでのやり方を踏襲しつつ、変えるべきと考えた点は教学運営会議に諮りつつより学修者本位の大学教育、学修者の立場に立った教育をめざします。また、FD・SD室長には、新たな視点でのFD・SDの開催を依頼しております。

本年度は、将来ビジョン150 第3期中期行動計画（前期）（令和7年度から令和10年度まで）がスタートしました。第2期中期行動計画の教育開発センターに関わる具体的施策は、概ね達成できましたが、「学修成果の可視化」については課題が積み残されています。

その課題を克服すべく今年度は検討に入ったところです。また学生の資質能力について、大学IRコンソーシアム調査による3つのポリシー点検結果に基づき、各学科主任等が本学学生の強みと弱みを評価した結果では、「分析力・問題解決能力の向上」、「文章力の向上」が課題として抽出されました。この二つの課題については教育企画室と学習支援室が連携をして、1年次より学生が継続して二つの能力を確実に向上していける学びの場の提供とシステムの構築をめざしていきます。このように今後も本学の高等教育が全ての学修者の「学び」の意欲を満たすと同時に、引き続き社会を支える重要な基盤となり、高等教育改革が全ての関係者の意見や思いをくみ取り、協力と支援を得ながら、進められるよう4室が協働して尽力していきます。

なお、社会に向けた取り組みとしてリカレント教育の充実として地域課題学修支援室が主となり、履修証明プログラム「伊勢志摩課題解決実践」を次年度秋学期から始めます。このプログラムは地域で活躍する社会人を対象に、知識の修得と演習を通じ地域の活性化や課題解決に向けた力を身につける実践力を育成します。このように学生のみならず地域の人たちへの学修支援に今後も尽力していきます。



駒田聡子（教育開発センター長）

## 令和9年度カリキュラム改定に向けて

令和9年度からの新カリキュラムの導入に向け、大学及び各学科3つのポリシー「学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）」「教育課程編成・実施の方針（カリキュラム・ポリシー）」「入学者受入れの方針（アドミッション・ポリシー）」を一体的で整合性を持つように検討しました。改訂した皇學館大学3つのポリシーでは、それを示す前文に、前回ポリシーの中で卒業認定・学位授与の方針に含まれていた『本学は「我が国民族の歴史と伝統に基づく文化を究明し、洋の東西に通ずる道義の確立を図り、祖国愛の精神を教育培養するとともに、社会有為の人材を育成すること」を教育研究上の目的とします』という教育研究上の目的を新設し、それを明らかにしました。また各学科では、この教育研究上の目的に記された「社会有為の人材を育成すること」すなわち本学の伝統を基盤に置きながら今社会で求められる人材育成のための各学科のポリシーを検討し、学科の特性を活かしたコースを定めました。神道学科は、神道・宗教文化コース、国文学科は国語学・国文学、国語教育（中高教員）、書道・漢文学、図書館司書の4コース、国史学科は、国史総合、歴史教育（中高教員）、歴史文化財の3コース、コミュニケーション学科は、グローバル・コミュニケーション、英語教育（中高教員）、心理学、データサイエンスの4コース、教育学科は初等教育、幼児教育、保健体育（中高教員）、数理教育（中高教員）の4コース、現代日本社会学科は、経営革新、地域創生、福祉展開の3コースです。ポリシー、コース、そして各学科の3つの資質・能力が決定し、履修系統図も完成し、新カリキュラムが策定されました。今後は教育開発センターとして組織的で体系的な教育を展開し、学生の能動的な学修の充実を図るためにさらなる環境の整備を検討していきます。なお、令和9年度カリキュラム策定に伴い、副専攻についても検討を重ね、現在の7副専攻から大学の教育目標に沿って本学出身者として特に学際的視野を身につけてほしい時代に即した学びの分野である「伊勢志摩定住自立圏共生学 副専攻」「データサイエンス 副専攻」「日本語教育学 副専攻」の3副専攻に減じました。このように、主専攻、副専攻ともに本学で何を学び、何が身につくのがより明らかとなりより一層組織を挙げて質の高い高等教育を目指していきたく思います。

駒田聡子（教育企画室長）

## 新履修証明プログラム「伊勢志摩課題解決実践」令和8年10月スタート

本学では令和8年度秋学期より、新たな履修証明プログラム「伊勢志摩課題解決実践」を開講いたします。本プログラムは、従来のプログラムを全面的に刷新し、地域課題の解決に情熱を持つ行政職員や集落支援員、地域運営組織の関係者などの「アクティブ・シチズン」を対象とした、より高度で実践的な学びの場です。最大の特徴は、現場（実践コミュニティ）と理論（学修コミュニティ）を往還する「越境学修」にあります。受講者は自身の関わる具体的な地域課題を持ち込み、専門家である教員の伴走支援を受けながら、解決に向けた知識・技術・マネジメント能力を体系的に修得します。

プログラムは以下の4講座（計66時間）で構成されます。伊勢志摩課題解決「基礎：座学とワークによる体系的な知識習得」「演習：受講生同士の議論による多角的なフィードバック」「実習：三重県内をフィールドとした実際の課題解決活動」「展開：成果発表会を通じた外部への発信」の4つです。

社会人が受講しやすいよう、授業は平日夜間（18:30～）のオンライン併用を基本としています。本学が培ってきた地域連携のノウハウを凝縮し、地域の定住機能を支えるリーダーの育成を通じて、持続可能な地域社会の実現に寄与してまいります。

池山 敦（地域課題学修支援室長）

《履修証明プログラム「伊勢志摩課題解決実践」のリーフレット》

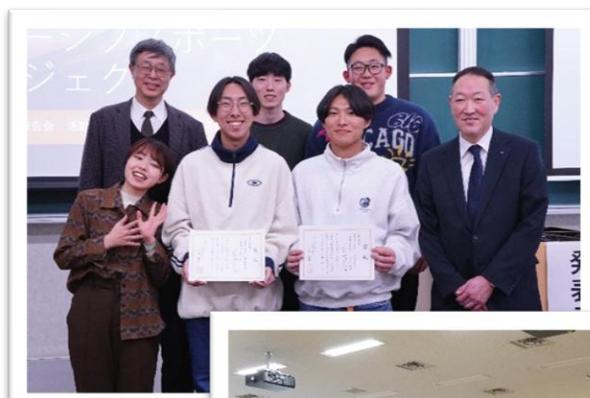
## 令和7年度「伊勢志摩定住自立圏共生学教育プログラム」学修成果発表会を開催

令和8年3月10日、本学621教室にて「令和7年度 伊勢志摩定住自立圏共生学教育プログラム 学修成果発表会」を開催いたしました。日頃より当室の教育活動を温かく支えてくださっている皆様に、心より感謝申し上げます。この発表会は、学生たちが地域課題の解決に向けて取り組んできた成果を広く皆さんと分かち合う場として設けているものです。

第1部の「地域志向研究発表会」では、3名の学生が4年間の学びの集大成として、自身の専門分野と地域の課題を掛け合わせた研究発表を行いました。続く第2部の「CLL活動報告会」では、ポスターセッションと選抜10団体による口頭発表を実施。地域の方々と直接言葉を交わす中で、学生たちも多くの刺激をいただき、非常に実りある時間となりました。また、第3部の表彰式では、来場者の皆様の投票により「インクルーシブスポーツ推進プロジェクト」がオーディエンス賞とポスター賞をダブル受賞したほか、各市町からも優秀なレポートへ賞が贈られました。

学生たちが地域の中で生まれ、自分の考えを自分の言葉で伝えられるようになったのは、ひとえに自治体や地域の皆様の温かい支えがあったからこそです。これからも地域とともに歩む本プログラムを、どうぞよろしくお願いいたします。

池山 敦（地域課題学修支援室長）



ダブル受賞した「インクルーシブスポーツ推進プロジェクト」

発表者と会場にご参加いただいた皆さんとの集合写真



## デジタルバッジの導入

デジタルバッジは、これまで個人が習得した知識やスキルを、紙ベースではなく世界共通の技術標準規格に沿って発行されるデジタル証明・認証です。すなわちこれまでの学習歴がデータとして授与され、授与されたオープンバッジはSNSでの共有ができるだけでなく、その内容証明として様々な場面での活用が期待されるものです。本学では昨年度から数理データサイエンスにおいてその導入が検討され、本年度（令和8年3月）より、数理データサイエンス リテラシーレベル、応用基礎レベル両方での発行が出来るようになりました。今後は、様々な分野でデジタルバッジが導入され、学生の学びのモチベーション向上に繋がることを期待しています。



数理・データサイエンス・AI教育プログラム  
オープンバッジ(リテラシー・応用基礎)

駒田聡子（教育企画室長）

## プレースメントテストの実施（日本語・数学）

本学では毎年、新2年生を対象に3月末から4月上旬にかけて数学プレースメントテストを、新1年生には4月上旬から中旬にかけて日本語プレースメントテストを実施しています。今年度も昨年度と同様、オンラインで実施しました（いずれも令和3年度からオンラインです）。数学プレースメントテストのスコアは特に単位取得には関係ありませんが、今後の自身の学習や進路に役立ててもらえたらと思います。日本語プレースメントテストに関しては、一定基準以上のスコア取得が「初年次ゼミ」の単位取得条件になっているため、一定基準以下の場合には再受験での合格が求められます。再受験をするまでの間、自ら学習することは当然ですが、指導教員からの個別指導に加え、学習支援室でも本学のmanabaにおいてドリル練習の提供やアドバイスを行っています。日本語プレースメントテストの結果がよかった学生も結果に満足せず、語彙力を磨き、文章力を向上させていってほしいです。日本漢字能力検定協会の「文章読解・作成能力検定」（文章検）の実施以外にも何か学生の皆さんが取り組めるものを、今後検討する予定です。

濱畑静香（学習支援室長）

## 新カリキュラム構築に関するFD活動

令和7年度は、新カリキュラム構築に関するFD活動を実施しました。第1回FD活動として、令和7年8月27日に「立命館大学およびスポーツ健康科学部におけるポリシーとカリキュラム構築について」のテーマでの河井亨先生（立命館大学スポーツ健康科学部教育・学修支援センター）にご講演をしていただきました。3ポリシーを意識したカリキュラム構築の方法について、具体的な実例を交えてお話いただきました。特に今後のカリキュラム構築にあたり、立命館大学が実施している「スリム化」については本学も積極的に取り入れていくべきことだと感じました。

第2回FD活動として、令和8年2月6日には、張磊先生による「「考える力」を支援するAIツール－ Notebook LMを大学教育でどう使うか」と題して実践報告をしていただきました。今後の授業運営だけでなく、様々な教育活動への利用が期待できる素晴らしいツールを教えていただき、非常に興味深いお話で、ご講演後多くの先生方から今後の教育活動に活かしていきたいとのお声をいただきました。

上野祐一（FD・SD室長）

## 障がいのある学生支援に関するSD研修

適応の困難さを抱えやすい、青年期の精神疾患や発達障害についての理解を図る目的で令和8年1月6日に谷井久志先生（皇學館大学非常勤講師）を講師にお迎えし「適応の困難さを抱えやすい、青年期の精神疾患や発達障害について、理解を図る」というタイトルのもとご講演をいただき、SD研修を実施しました。

学生に見られる精神疾患や発達障害について、①起立性調節障害②てんかん③パーソナリティ障害④解離性障害⑤双極性障害やうつ病⑥発達障害（特にASD領域の特徴が強い場合）につきまして様々な事例を交えながら非常に具体的にお話いただきました。

青年期は誰でも不安定になり、適応の困難さを抱えやすい時期でもあり、適応が難しくなるのは“弱さ”ではなく、発達上の必然でもあるということで、困難な時期を生きる大学生に対して「その学生が、今、何が一番困っているのか」について理解すること自体が支援であること、そして支援はチーム（教務・学生相談・家族など）で行うことが大切だと教えていただきました。

上野祐一（FD・SD室長）

## 各室からのお知らせ(令和7年度活動報告/令和8年度計画)

## 教育企画室

①教育企画室での本年度の大きな事業は、令和9年度カリキュラム編成に向けた共通科目のカリキュラムの見直しでした。文部科学省が求めるディプロマポリシー(学位授与方針)に基づく学修目標の具体化、科目数の削減と内容の精選、すなわちカリキュラムのスリム化に沿い、大学の3つのポリシーを連動させながら本学がめざす学修者像に合致した科目を共通科目として精選しました。大学の共通科目としての必要性を特に核としてスリム化に取り組むことが出来ました。

②これまで紙ベースで発行してきた数理データサイエンスの履修証明書の、デジタルバッジという必要であれば個人がいつでも発行できるシステム導入に向け、規約の策定、デジタルバッジデザインの決定、申請書類の書式決定に取り組んできました。数理データサイエンスに関しては、年度内での発行が出来るようになりました。今後も、デジタルバッジの導入が様々な分野で広がることを期待しています。

③次年度以降に残された課題としては、これまで1年次と3年次に導入していたPROGが、学修者のセルフアセスメントに繋がっていない実態があったため、次年度から実施を取りやめましたが、それに変わるディプロマサプリメントとしてどのようなシステムを取り入れていけば良いか結論が出なかった点です。この点については、学習支援室と連携をとりながら、効果的かつ学修者にも教員側にも有効な学修成果の可視化に向けたシステムの導入を検討していきます。

(教育企画室長 駒田聡子)

## 学習支援室

学習支援室は7つの業務を掲げており、その1つが学習相談です。本学は指導教員が学業の面だけでなく、学生生活全般においても相談にのります。指導教員への相談で解決できることも多くあるためか、学習に関する相談で学習支援室に来る学生が少ないのが現状です。今後の体制を検討していく必要がありますが、先生方からはご相談をいただくこともあり、今年度も個別に対応いたしました。昨年度までは現代日本社会学部の教員が室員にいなかったのですが、今年度より現代日本社会学部の教員も学習支援室に室員として加わったため、より広く学生の声や教員の声が届くようになりました。今後も指導教員の先生方や学科と連携を取りつつ、学習支援をしていきます。

また、昨年度(令和6年度)から本学で文章検の団体受検を実施していますが、令和7年度は1回のみの実施(令和8年1月21日(水)V講時)となりました。結果は、準2級6名、3級5名の合格でした。今回、1年生が積極的に受検していましたので、来年度も引き続き1年生にはもちろん、2年生以上にも積極的にチャレンジしてもらいたいと思っています。できるだけ早い時期から受検案内を行っていく予定です。

最後にお知らせです。新年度早々には教職員向けのmanaba説明会を開催します。基本的な操作に関する説明です。後日、ご案内をご覧ください。

(学習支援室長 濱畑静香)

## 地域課題学修支援室

地域課題学修支援室では、これまでもCLL活動に代表される、体験的なものをはじめとして学生の地域課題に関する学修を支援しています。令和7年度は伊勢志摩定住自立圏教育プログラムをベースにした履修証明プログラム「伊勢志摩課題解決実践」プログラムを開発し、学内外の諸機関と調整しながら、令和8年度秋学期から開講できるよう準備を進めてまいりました。年度内に2回開催された伊勢志摩定住自立圏共生学運営会議において当プログラムについて連携8市町から意見を聴取し、8年度以降の受講生の送り出しも含め引き続き協力を依頼させていただきました。

お陰様で、なんとか秋学期からの開講の目処もついたところですが、令和8年度はそれに合わせて、文部科学省職業実践力育成プログラム(BP)認定制度の申請を目指し準備を進めてまいります。

(地域課題学修支援室長 池山 敦)

## FD・SD室

令和7年度は、令和6年度まで3年計画で実施しておりましたティーチング・ポートフォリオ(TP)に関する取り組みを実施し、新カリキュラム構築のために必要な考え方や知識を得ること、教育現場でのAIツールの導入・活用を考えることを目的としたFD活動を2回実施いたしました。新カリキュラム構築については、3ポリシーを意識しながら各学科にて時間をかけて練り上げていただいています。時代が刻々と変化していく中でどのような学びを学生に提供していくのかを大切にしながら、カリキュラムの検討、そして構築をお願いしたいと思っております。また、今後より一層生成AIが進化・発展していく中で、どのようにAIと共存していくのかは大切な問題となってきます。そのきっかけとして、第2回のFD活動ではNotebook LMを例にどのように大学教育に活かしていくかにつきまして、先生方でご議論いただきました。今後、実際に使っていただくことを通して、授業改善、教育力向上の一助になればと考えております。

一方、SD活動については、職員の質向上や働きやすい職場づくり、安全と健康の確保、多様な学生理解のためのLGBTQ+への対応、メンタルヘルス、また障がいのある学生支援などの多様な研修を実施しました。日々の業務の中での自分を見つめ直す機会となり、一人ひとりが向上できる研修となりました。令和8年度も引き続き、教職員の皆様にご協力をお願いいたします。

(FD・SD室長 上野祐一)

## 皇學館大学 教育開発センター

## News Letter vol.06

発行日:令和8(2026)年3月28日

発行:皇學館大学 教育開発センター  
〒516-8555 三重県伊勢市神田久志本町1704  
TEL:0596-22-6331  
E-Mail:kaihatsu@kogakkan-u.ac.jp  
<https://www.kogakkan-u.ac.jp>